

中東問題を観る眼

朝日カルチャーセンター・新宿教室

若林 啓史

講座の全体像

- 第1回 中東の人は全員イスラーム教徒？ 中東の少数宗教 その1：ゾロアスター教
- 第2回 中東の人は全員イスラーム教徒？ 中東の少数宗教 その2：ユダヤ教
- 第3回 中東の人は全員イスラーム教徒？ 中東の少数宗教 その3：東方キリスト教
- 第4回 イスラームは偏狭な宗教？ 寛容な宗教？ 中東の多数宗教・イスラーム
- 第5回 中東は部族社会？ 中東の社会構造 その1
- 第6回 中東は宗派で分断されている？ 中東の社会構造 その2
- 第7回 中東は男尊女卑？ 中東とジェンダー
- 第8回 中東の国々はどこも産油国？ 石油問題と中東観のかたより
- 第9回 中東に民主主義は根付くのか？ 中東民衆の政治参加**
- 第10回 イスラエルと湾岸アラブ諸国は手を結ぶのか？ 中東の新たな対立構造
- 第11回 日本外交における中東の重みは？ 中東外交の黄昏
- 第12回 なぜ日本の中東論文は英語で書かれるのか？ 戦後日本の中東研究

【中東地図】



第9回 中東に民主主義は根付くのか？

中東民衆の政治参加

2023年9月28日



写真 カージャール朝ペルシア帝国の立憲革命 1906年7月頃撮影

1906年7月、立憲制度の導入を要求する民衆が、テヘラン北部ゴルハクのイギリス公使館夏季公館の広大な庭園に集結し、一時1万5千人に達した。宗教界とバザール商人は立憲制度を支持した。圧力に屈したモザッファロドディーン・シャーは、8月5日、国民諮問議会開設の勅令を発した。立憲革命は、「国民の勝利」と称されたが、背後から事態を操縦したイギリスの影響は強まった

1 中東の民主主義

- 中東諸国は、王制や共和制を採用、現在では湾岸地域の一部を除き、憲法を制定し、選挙制度を導入しています。しかし、イスラエルを例外として、中東諸国のほとんどは、国王や大統領が独裁的な権力を握る、権威主義体制に陥ったとされます
- 中東における民主化の試みは、近年の「アラブの春」に至るまで、様々に行われましたが、いずれも成果に結びつかないようです。これは、欧米がイスラエルを支持し、他の中東諸国に介入する口実となっています
- 一方、中東の独裁的権力者は、民意に敏感で、民意を読み違えると、権力を失う事実も観察されます。中東諸国において、制度的な民主主義が機能不全となっても、非制度的な民主主義が補完している実態を指摘します



写真 イスラエルのクネセト 1949年5月1日撮影

第一次中東戦争最中の1949年1月、イスラエルの制憲議会選挙が行われ、120人の議員が選出された。制憲議会は発足直後、「クネセト」と改称して立法府となった。同年2月、議会はワイツマンを名誉職の色彩の強い大統領に選出した。翌月、ベングリオン（写真中央・演壇前を歩く人物）を首相に選出して行政府を樹立した

2 立憲制のはじまり

- 欧州列強への抵抗を試みる現地指導者・民衆の側では、「アラブ」、「イスラーム」など独自の社会統合理念の模索と併行して、法制度・政治制度の近代化、端的には憲法制定によって列強との対等な地位を回復し、植民支配に対抗しようとする動きが現れました
- チュニジアの憲法制定（1861年）は最も早い例でしたが、保守的社会層の反対で憲法は停止されました
- オスマン帝国では、支配体制が動揺した1876年、憲法が發布されました。しかし、権力を確立したスルターンによって、2年後に憲法は停止されました。その後、統一進歩委員会のクーデター（1908年）により、憲法復活が宣言されました
- エジプトでは、アラビー大佐の叛乱を経て、1881年、憲法が制定されました
- 20世紀に至り、日露戦争やロシア第一次革命（1905年）の衝撃で、再び立憲制導入への要求が高まりました
- カージャール朝ペルシア帝国では、1906年の議会開設が立憲制の導入となりました。しかし翌年、英露が新興ドイツに対抗するため妥協したことを背景として、シャーによる憲法停止をイギリスは黙認しました。立憲運動側は1909年、首都を武力制圧しましたが、1911年には、ロシアの介入でシャーの権力が復活しました



写真 イstanbulのタクシーム広場で演説するイノニュ大統領 1950年5月9日撮影
トルコ共和国成立後、ムスタファ・ケマルは一党独裁政治を行った。第二代大統領には、長年ムスタファ・ケマルを支えたイノニュが選出された。イノニュは、一党独裁と国営経済による国家運営が限界に達したことを悟り、民主主義の拡大を国民に示唆していた。イノニュは新党結党の協議を行い、1946年にはバヤルを党首とする民主党が結成された。同年の総選挙以降、共和人民党と民主党による複数政党制の時代に入った。1950年の総選挙で民主党は圧倒的な勝利を収め、バヤルが大統領、メンデレスが首相に就任した。イノニュの率いる共和人民党は野党に転落した

3 立憲制の定着と空洞化

- 立憲制導入は近代化の一環として理解され、専制的支配を法の下に置くことで欧州諸国と遜色のない政治制度を実現し、列強との不平等な地位を改善する意図が存在しました。しかしほとんどの場合、憲法は専制君主や保守的社会層の反撃で一時停止されました
- 英仏支配下で、中東に国民国家の体裁を採った国々が誕生すると、各国に憲法が普及しました。しかし中東諸国の憲法は、専制政治や植民地化への抵抗という本来の使命を失って空文化し、いかなる政治慣行とも共存する儀礼的文書に変容してしまいました
- なおイスラエルでは、建国宣言に憲法の制定が謳われました。しかし、憲法草案の審議過程で世俗主義者と宗教的保守派の対立が生じ、草案は棚上げとなりました
- またサウジアラビアでは、1992年に「統治基本制度」という勅令により、他国の憲法に類する基本法が制定されました。しかし、三権は国王に属するとされています(第44条)



写真 ナーセル大統領 エジプトのマンスーラで1960年5月7日撮影

ナーセルは反王制・反英を掲げる「自由将校団」を創設、1952年7月、クーデターにより王制を倒した。ナーセルは革命後、首相に就任し、1954年には、初代大統領ナギーブを追い落とした。1956年6月、新憲法草案とナーセルの大統領選出が国民投票に付され、それぞれ99%を超える賛成票によって採択された。既成政党は解散させられており、軍の力を背景にした独裁体制が名実共に完成した。ナーセルはアラブ・ナショナリズムを唱道、同年7月にはスエズ運河の国有化を宣言した。これをきっかけに第二次中東戦争が発生したが、ナーセルはエジプトのみならず、広くアラブ世界で熱狂的な支持を得た

4 権威主義体制への傾斜

- 中東諸国では、憲法や基本法の名称で、他国と同様の民主主義の制度的枠組みは既に準備されています。しかし、一部の国を除いて、民主的な制度が機能不全に陥っている実態があります
- 多くの国では、革命やクーデターによる体制変換を経験しています。これらの国々では、「革命評議会」や軍などが、国法を超越した実権を掌握し、戒厳令や緊急事態法を根拠に、憲法などの定める国政の運用を一時停止しました
- 革命政権や軍政が民政移管される際には、一党独裁と政治化された軍・治安機関が、権威主義体制を支えました。つまり、国家機関が権力分立の原則に従い、相互抑制を行う建前は維持されますが、上意下達の支配装置と化した党が、全ての国家機関を事実上統制するようになります。政権への反抗は、実力で抑止されます
- 一方、イスラームの政治的伝統では、支配者は民衆から権力を付託される必要があり、支配者の交代時には、民衆による「服従宣誓」を受けなければなりません



写真 イラン革命：ホメイニー師の支持者たち テヘランで1979年2月2日撮影
ホメイニーは、支配者がイスラーム法学者の監理・監督に服す「法学者の統治監理」という思想を生み出した。この思想はやがて、矯正不能な支配者を追放する革命思想に転化した。モハンマド・レザー・シャーは、土地改革を手始めとする社会改革に乗り出した。ホメイニーは政府の近代化・西欧化改革に異を唱え、政治の場に姿を現した。1964年、政府はホメイニーを国外に追放した。イランは、潤沢な石油収入を元に、急激な経済成長を達成した。しかし、多数のイラン民衆は経済的利益を実感することができず、西欧化を前に不満を蓄積させた。1978年、宗教勢力の拠点都市コムの暴動を発端として、シャーへの抗議はイラン全土に拡大した。1979年1月、シャーはイランを後にし、同年2月1日、ホメイニーは帰国した

5 大衆民主主義による補完

- 王制を採用する中東の国には、サウジアラビアのように、今でも伝統的な「服従宣誓」を絶対的権力の源泉として明示している場合があります。多くの国は、「服従宣誓」を過去の制度とみなしますが、独裁的な権力を握る支配者ほど、民衆の直接的な支持を政権の正統性の根拠として重視しています
- 民衆の側では、制度的な民主主義の恩恵からは遠く、日頃、政治的抑圧や政府機関の腐敗に悩まされています。しかし、生活が脅かされるようになれば、制度によらない政権への直接抗議に打って出ます
- 伝統的には、商工業者が一斉に店を閉めて街頭に出る行動は、政府への不服従の意図表明とされました。現代でも、民衆が食糧の高騰などに抗議して暴動を起こせば、政権にとって致命傷になることがあります。独裁的支配者は、政敵は恐れませんが、民衆による支持の撤回は、権力基盤を失うものであり、非常に恐れています



写真 サッダーム・フサイン大統領 バグダードで1995年10月18日撮影
1968年、サッダーム・フサインの従兄弟バクルは、イラクのバアス党を率いてクーデターを起こした。1970年代に入ると党と民兵組織を掌握したサッダームが抬頭し、バクルの権力は形骸化した。1979年、バクルは健康問題を理由に辞任、サッダームが大統領に就任した。サッダーム政権は、イラン・イラク戦争、湾岸戦争、イラク戦争など、常に大規模な戦乱の渦中にあった。しかし、国内ではバアス党と治安機関を柱とする強権支配で反対勢力を抑圧し、対外的にはアラブ・ナショナリズムを掲げてイスラエルやアメリカと戦うレトリックにより、アラブ民衆の一定の期待を担った。その意味では、一党独裁により政敵を排除しつつ、国内外の民衆の支持を重視する、ナーセル大統領に始まったアラブ独裁者の典型であった

6 独裁者の苦勞

- 中東の独裁的支配者は、民衆の望むものを知り、それを実現することに腐心しました
- アラブ独裁者の一典型であったサッダーム・フサインは、イラクの電話帳の最初のページに、自分の電話番号を載せていました。密告を奨励していると解釈する者もありましたが、何よりも、民衆の声を側近に妨げられずに聞く姿勢を表現していたと思われます
- また、サッダーム・フサインは、背広、軍服、民族衣装を使い分け、国内のさまざまな民族・宗派・地域・職能集団の代表を次々と引見、政権への支持を確認し、彼らの要望を聴取しました
- 戦時には、戦没者の家族に新車などを与えて慰め、経済制裁が厳しくなると、市内を視察して庶民の台所を調べ、テレビカメラの前で冷蔵庫の食糧を尋ねました



写真 「アラブの春」：広場に集結する人々 カイロで2011年2月18日撮影

2010年12月17日、チュニジアの地方都市スィディー・ブーザイドで始まった政権への抗議は、社会情報通信網を通じてチュニジア全土に拡大した。ベン・アリー大統領は2011年1月14日、出国を余儀なくされた。同月25日、政権への抗議運動はエジプトに波及した。その日は「怒りの日」と名付けられ、人々はカイロ中心部のタフリール広場（写真）など、主要都市の街頭で一斉に抗議活動を開始した。2月11日、ムバーラク大統領はヘリコプターでカイロから脱出、副大統領はムバーラク退陣を発表した

7 民主主義優等国とその将来

- 中東諸国の中で、民主主義が先進国並みに機能していると讃えられたのは、イスラエルでした。イスラエルでは、建国以来、労働党など左派政党が中心となる政権が続きましたが、1977年、右派政党リクードが政権を奪取しました。その後2000年までは、左右両派の政権交代の時代となり、今世紀に入ると左派政党は凋落しました。現在は、リクードと極右諸政党が連立内閣を形成しています。さらにネタニヤフ政権の「司法改革」により三権のバランスが崩れ、民主主義そのものの危機が叫ばれています
- トルコでは、ムスタファ・ケマルによる一党独裁政治の後、イノニユ大統領が複数政党制を導入、1950年には政権交代が実現しました。しかしケマル主義の守護者を自認する軍部は、たびたび政治介入を行いました。エルドアンが率いる公正発展党が2002年に政権につくと、軍部とイスラーム復権を目指す勢力の力関係は変化しました。数次にわたる軍人らの粛清の結果、エルドアン大統領の権威主義政治が目立つようになりました